〔東京家政大学研究紀要　第42集 (1), p.133～139, 2002〕

ことばの獲得初期における音楽的表現

――身体で感じるリズム――

細田　淳子

(平成13年10月4日受理)

Musical Expression at the Beginning of Infant Language Acquisition

−the Rhythm Expressed with their Bodies−

Junko HOSODA

(Received on October 4, 2001)

キーワード：幼児，リズム，模倣，身体的表現

Key words : Infant, Rhythm, Mimic, Physical Expression

1．はじめに

子どもは出生後間もなく産声をあげ，その後空腹時に泣き，不快な時にも泣く．生後1ヶ月を過ぎる頃から，気持ちの良い時には「アー」「ウー」という声を発するようになる．こういったクーイング(cooing)と呼ばれる喃語が，半年後には「バ，バ，バ」「ダ，ダ，ダ」という子音と母音からなるバッブリング(babbling)といわれる喃語に変化し，1歳頃にはかなり複雑な「マンマンマンーマー」「ダアーダアーダアー」といった喃語を発するようになる．

これらの音声は次第にことばとなる系脈と歌となる系脈へと分化していく，と一般に考えられている．筆者は一連の研究で，ことばと歌が分化する頃の発達の様子を明かにすることを目的としている．前回の研究（細田2001）では，ことばや歌が出る頃（1歳すぎから2歳位）に注目したが，本研究ではそれより少し前の発達段階を，音楽的な表現という視点から明らかにする．子どもは，ことばや歌を発する前から，他児と同じ音色の声を，模倣して出すことを楽しんでいるようである．またうたえるようになる前から音楽を楽しみ身体でそのリズムを感じ，表現しているのである．

児童学科　音楽表現研究室

2．研究の目的

本論では，一連の研究（細田2001）を基に，つぎの2点を明らかにすることを目的とする．

第一に，子どもはことばを発し始めたり，歌をうたい始めたりする頃よりも早い時期から，ことばや歌を聞きとり，模倣を試みているのだろうと考えられる．それはいつ頃からどのように行われているのだろうか．

第二に，子どもが歌を獲得するよりも早い時期の音楽的表現にはどのようなものがあるのか．音声の表現だけでなく，どのような表情で，身体でリズムをどのように感じどのように表現しているのか．それらの表現はどのくらいの発達段階で現われ，歌う表現にどのようにつながっていくのか．

以上二点を保育施設の日常生活の中に見ていくことにする．

3．先行研究

筆者の先行研究「ことばの獲得初期における音楽的表現―子どもがうたい始めるとき―」(細田2001)では平成11年度に4名の1歳児を観察し，ことばを急にたくさん発し始める時期と，既成の歌の一節をうたい出す時期に注目した．

ここでいう「ことばの獲得初期」を小山(2000)の分

類に従って次のように定めた．最初の有意味語の獲得されるまでの「前言語期」とよばれる時期に始まり，「初語」が出現する1歳前後を経て1語発話から2語発話が出現する頃までを広く捉えることとした．

また，「ことばを急にたくさん発し始める頃」は所謂「ボキャブラリースパート」を指している．(小山 1999) 初語を獲得してからしばらくの間は徐々に新しい語を獲得していくが，1歳後半頃に，1日に数多くの新しい語を獲得し，語彙が爆発的に増加する．子どもを観察していると，急に語彙が増えた時はすぐにわかるが，念のために表出語彙が完全に10語を超えた事を確認したのちに判定した．

次にこの研究においては，どのような発達段階の声を「歌」と定義することが可能であるかという問題に対して，筆者は5項目のカテゴリーを示した．これは，乳幼児のどのような声を「歌」とするかについて未だ定説が無いためである．そしてその中で第3カテゴリーの，「既成の曲の一節をうたっていると判断できる声．何の歌をうたおうとしているかが，表現の受け手にわかるもの．」を「歌」として扱うことに定義し，論を進めた．

以上の研究の結果，4人のうち3人が，うたい始めるより，ことばを急にたくさん発し始める方が約2ヶ月早かった．残る1人がその逆であることがわかった．

他の研究者による幼児の歌の先行研究の多くは，対象が2～3歳以上で既にうたい始めている幼児を研究している．喃語の時期の音楽的表現に関する先行研究は，音楽的観点からその音響的特徴の分析をしたものや，メロディーや音程の分析をしたものが多く，他の身体のリズム表現などと結び付けた乳幼児音楽の研究は見当たらない．

例えば伊藤 (1987) は早くも生後3ヶ月から調べはじめている．ところが，音声の録音しか行なっていないので，どのように音楽に反応し身体を動かしていたのかは，わからない．志村 (1991) も同様に8ヶ月の乳児からを対象にしているが，やはり音声以外の音楽的表現は視野に入れていないため，録音のみでビデオ撮影は行っていない．

4．研究の方法

① 対象：東京家政大学ナースリールーム（産休明けから3歳未満児の保育室）に在室するつくし組の 0―1歳の乳児5名．全員男児．

K児 ('98.11.6 生)　2000年4月に1歳5ヶ月で入室
M児 ('99.1.25 生)　2000年4月に1歳2ヶ月で入室
T児 ('99.7.21 生)　2000年4月に8ヶ月で入室
Y児 ('99.12.25 生)　2000年4月に4ヶ月で入室
I児 ('00.2.10 生)　2000年6月に3ヶ月で入室

② 観察期間：2000年4月から2001年5月まで

③ 方法：対象児の担任保育者，小野明美[1)]と筆者が共同で研究を行った．観察は日常保育の中で現われた音楽的表現を拾い出すことに徹して行い，実験的に音楽をかけてその時の子どもの反応をみる等の故意の方法を一切行わなかった．

1週間に1～2度ビデオカメラ[2)]で10分～60分撮影して各児の生活を収録し，観察記録をとった．後にVTR録画，観察記録，および担当保育者による保育日誌から，関連すると思われる事例を書き出し，共同研究者と検討した．

5．注視と追視

乳児5人を観察していると，実によく人や物を見ていると感じる．じっと，しっかり見つめている視線をはっきり感じることができる．また保育者がうたうとその目や口元をじっと見つめている．そのような，乳児が回りを良く見ている様子は日常のことであり，事例として挙げるまでもないが，本研究記録の中から2事例を以下に記す．

5―1事例

事例①　I児（6ヶ月）腹ばいでおもちゃを舐めながらT児（1歳2ヶ月）の顔をじっと追視している．

事例②　Y児（4ヶ月）がオルゴール人形をじっと真剣な眼差しで見つめている．手は人形に触っている．＜写真1＞

＜写真1＞　見つめる　Y児4ヶ月

5－2考察

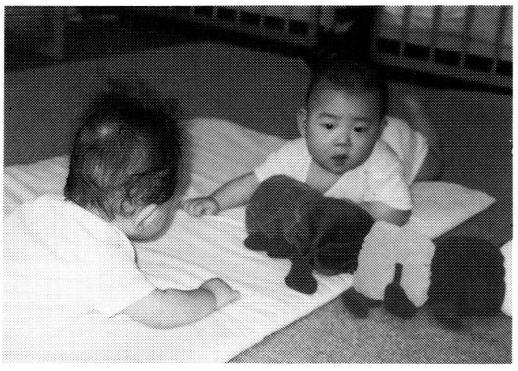
視覚は生後徐々に発達し，母親の顔がはっきり見えるのは生後2～3ヶ月頃で，それも抱いて授乳をする時の母親と子ども顔の距離だという（吉村真理子 1990）．岩堂美智子（1991）によると生後2カ月を過ぎると，乳児は注視している物に沿って，水平方向に追視できるようになる．続いて3ヶ月で垂直方向へも追視が可能になるという．さらに岩堂（1991）は，集団保育施設において，他児への注視，発声が，生後2～3ヶ月から観察されることを指摘している．そのことが本研究でも確認できた．特に保育室の中で同年齢の子どもの行動を注視しており，その対象が動くとずっと目で追いかけて，追視している．

6．模倣表現

周囲の大人や子どもの様子をよく見たあと，子どもたちは模倣を始める．切替（1968）らは，生後6～7ヶ月を過ぎた喃語期に続く時期を，音の模倣期と名づけている．知能，感覚，運動などの機能が活発に外界へむけて発揮される時期である．しかし研究者によって模倣期の認識には幅があるようで，坂口（1992）は「他の子どもの声や動作を模倣するようになるのは9～13ヶ月である」として動作の模倣も同様に扱っている．本研究の観察によると，模倣の種類によってはもっと早い時期から始まる事例もある．ここでは興味深い6ヶ月の乳児による事例を報告する．

6－1事例

事例③　乳児保育室の床にY児（6ヶ月）とI児（5ヶ月）をそれぞれマットの上に寝かせている．ミルクを飲んだあとの機嫌の良い時間なので，ベッドから降ろし，広々したところに保育者と共にいる．そこで保育者がY児の寝ているマットを動かして，I児と顔が見合えるような，つまり視線が合うような位置に置き直した．



＜写真2＞　模倣する　I児（5ヶ月）とY児（6ヶ月）

Y児はI児が見えると「アハハハハ」と笑いかける．I児が泣くと「アアー」と同じ様な声を出す．I児の方も，Y児の「ウーアー」という声を聞くと，非常に似た音質の声で答え，二人は呼びかけあっている．＜写真2＞

6－2考察

わずか5ヶ月と6ヶ月のふたりではあるが，お互いを意識して，相手を見て笑ったり，泣き声や，「ウーアー」というような声を聞いた時に，実によく似た声を出し合ったりしている様子は非常に興味深い．保育者の日誌には「声が出ることに気付いて楽しんでいるようである.」と記録されている．

この頃の音声の模倣は，ことばの発音を一つ一つ模倣する，というよりは，その音声の音の高さや音質，全体のリズムや抑揚をまねしているようである．これはもちろんまだ自分の意志を相手に伝えるためではなく，模倣すること反復すること，そのものを楽しんでいる．あるいは，一緒にいることを伝えて，他児との応答を楽しんでいるのだといえよう．

相手を見ながら出す声が，相手の出した声の質と自然に似てしまうという点に驚かされる．おそらく保育者や親の，ことばかけやうたいかけに対しても，同じように自然な模倣が行なわれているのだろう．ただ，そもそも大人の声と乳児の声は大きく違うため，リズムや抑揚は似ていると感じても声の質まで似たものが発声されていることには気付きにくかったのだと思われる．

そのことは，Kuhl P.K. も次のように報告しているという．（小西 1994）「赤ん坊の声帯は小さいから，大人の低周波の声をそのまま真似ることはできないが，母親の声の抑揚のパターンを自分の出せる声で真似るのである.」

喃語と模倣について切替は「喃語が自分自身の内部での，刺激―反応の繰り返しであったとすれば，模倣は外界との間の，刺激―反応の繰り返しと考えることができる」という．（切替 1968）この場合必要なことは，まず外からの刺激を正しくとらえること，外におこった現象を，聴覚や視覚で正しく認識することであろう．

障害を持った子どもの場合，模倣能力の有無が発達のめやすを理解するひとつの指標として良く使われるという（宇佐川 1987）．それは身体表現や歌，リズム，楽器演奏など，音楽活動の多くが子どもの模倣能力に依存し

ているからであろう．つまり見て聞いて認識して，それから模倣するという順序のどこが欠けても模倣にならないということである．

7．身体的表現

子どもが，手足をバタバタさせて楽しんでいる様子をよく見かける．ここでは保育者の歌声やCDから流れる音楽に子ども達が反応し，身体で嬉しさを表現している様子の事例を3つ挙げる．

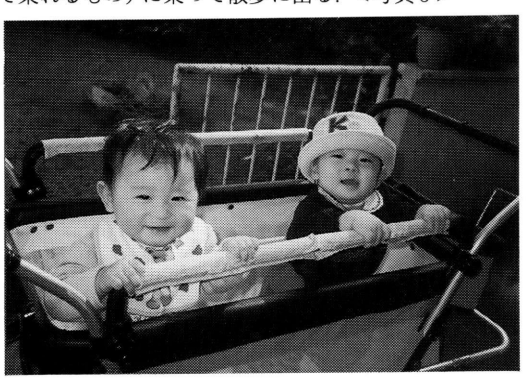
7―1事例

事例④　保育士が歌をうたうと，掴まり立ちがまだ出来ないY児（7ヶ月）は，きゃっきゃっと歓声を上げながら，うつ伏せの状態で両手を突っ張り，お尻を持ち上げて，リズミカルに身体を揺らして，楽しんでいる．

事例⑤　CD『たこやきなんぼマンボ』[3)]の曲をかけ，保育室の中で，K児（1歳10ヶ月）が踊っている．

Y児（9ヶ月）は，はじめそれを見てにっこり笑って喜んでいたが自分もリズムにのって踊ろうと思ったようで，膝立ちで左右に身体を揺らしていた．そのあとバランスが悪くなり立っていられなくなると，腹ばいになり，床に付けた腹部を中心に，くるくる風車のように5～6回連続してまわった．とても興奮して喜んだためか，目に涙がたまっていた．

事例⑥　乳母車（大きな箱型で3～4人の子どもが掴まって乗れるもの）に乗って散歩に出る．<写真3>



<写真3>　乳母車にのって
I児（9ヶ月）とY児（10ヶ月）

I児（9ヶ月）は保育者が歌うと，乳母車に掴まったままでリズミカルに上下に膝を屈伸させている．楽しさを全身で表わしているように見える．

Y児（10ヶ月）も一緒に乗っている．この日Y児は機嫌よく乳母車に掴まり立ちして散歩に出たのだった．片手を離してバイバイしたり，保育者の歌に合わせてリズミカルに膝を屈伸して楽しんでいる．

7―2考察

事例④のようにうつ伏せで両手をつっぱった状態でお尻を上下させて身体を揺らす様子は，他児の場合でもよく見かける．しかし，事例⑤のように腹ばいのまま喜んでくるくるまわるというのは，担当保育者も「始めて見た」と記録している．あまりに興奮していたので，5-6回まわったところで，保育者がそれ以上まわるのをやめさせたのだという．

事例⑥と同様リズミカルに上下に膝を屈伸させて楽しむ様子は，観察した5人全員それぞれに確認できた．掴まり立ちができるようになり，立っていることに少し余裕が出てきた頃の発達段階で，どの子どもも，保育者の歌声を聞くと，膝を上下させて音楽を楽しんでいる表現が表われていた．

それぞれの子どもが，その時点で出来る最高の表現方法で，身体の使える機能をすべて使って，楽しさを表現している．つまりベットで上向きに寝ている子は手足をバタバタさせ，座れるように（座位に）なると手を叩いて表現し，うつ伏せの時は腹ばいのままお尻を持ち上げてリズミカルに動いたりしているのである．膝立ちができるようになると上半身を揺らし，膝立ちも長い時間うまくバランスをとっていられない場合は，腹ばいでくるくるまわったりする様子も確認できた．さらに掴まり立ちの場合は，手はふさがっているが，膝の屈伸をし，立てる子どもは膝の曲げ伸ばしと上半身を左右に揺らしてリズムをとり，歩けるようになった子どもは，両手を上げて自由に動きながら踊る．

実に全身で楽しい気持ちを表現していることがよくわかった．これを音楽的表現と呼ばずに何と言ったらよいのだろう．音声だけに注目していたら見落としてしまうところであった．上記の全身の表現は声を出しながらの場合が多かった．笑い声であったり，「アー」とか「オー」という歓声の様な声など，それぞれに声を出し，笑みを浮かべながらリズムを取って動いていることが見てとれた．

8．考　察

人とのかかわりの基礎は，見つめる，あるいは泣く，笑うなどの行動である．見つめることは，乳児と母親にとって，最初の重要な相互作用の方法である．保育所等

においては同様に，乳児と保育者の重要なやりとりの手段である．乳児は保育者への愛着，信頼を拠り所に，外界認知を広げていく．そして，保育者との日々のやりとりのなかで，自己認識を発達させていく．見つめることは，乳児にとって外界認知，自己認識の第一歩と言えるのだろう．

二人がとても似た声を出していた事例③では，その声をコンピューターで音響解析することで，「似た声」の証明がなされるのであるが，経験の長い保育者の聴感をも大切にしたいと考える．

表現と表出という語を使い分けて小川（1988）は，「幼児の声はつねに，母親の語りへの反応として表出されているので，この段階を表現と呼ぶべきでない」としている．しかし見つめ合って，声を出し合い，笑い合っているこの二人をみていると，「楽しいよね」とその時を共有し，共感しているこころをまさしく「表現」していると思えてならない．

この事例は，月齢の近い乳児がお互いの声がよく聞こえる静かな空間に一緒に暮らしているために聞き取れたのであり，共感する心を育てるためには，このような落ち着いた静かな空間と時間が重要である．しかしながら一般には大きな部屋に多人数を保育している保育所などが多く，静かに相手の声を聞き取り，模倣することは，困難だろう．そうは言っても坂口（1989）が述べているように保育所や幼稚園のような保育施設は，幼児の社会性を発達させる場として意義があり，親が閉鎖的であり，地域などから孤立して育児をしている場合は，社会性が育ちそびれてしまう危険性がある．

身体的表現については［7－1事例］の3例にとどまらず，音楽を聴いたときの嬉しさ楽しさを，全身で表現していた．もちろん嬉しそうな笑顔で，その表情のよさは言うまでもない．子どもたちは足をバタバタさせたり，手をたたいたり，手で机を叩いたり，保育者のうたう歌に両手を上げて左右に揺れたり，さらには膝を屈伸してリズムをとったりしていた．表現の方法は，発達段階によって様々ではあったが，身体の使える機能は全て使っているようであった．好みの曲のＣＤが鳴り始めるとラジカセを見つめ興味を示したり，曲を聞きながら走り回わるなど，嬉しさを全身で表現しているのである．

音楽は，聞くこととうたったり音を出したりすること，つまり享受と表現との二面を合わせ持っている．乳幼児の音楽的発達を研究する場合もその両方をみていくべきではある．しかしながら，まだ言語能力の発達していない乳幼児を対象にした研究においては，聞こえたのか，どのように感じたのかを探ることは困難である．もちろん，最近の音楽認知，知覚研究では，さまざまな実験を行ない，どのように，どのくらい，聞こえているかを調べている．しかし，これはあくまでも実験室のなかの実験装置から出る音に対する反応であり，われわれが重要視している日常生活や日常保育の中における表現を探る事とは目的を異にする．

9．おわりに

今回の研究では，次の3点が確認できた．子どもたちが実によく見つめていること．しきりに模倣していること．そして発達にあわせ身体の使える機能を全て使って嬉しい時や音楽が聞こえて楽しい時に喜びを表わしていることの3点である．

現在，『乳児保育』という題のついた著作は，多数出版されている．今回は11冊の「乳児保育」について上記3点がどのように記述されているかをみた．

その結果，第1の乳児が物や人をじっと良く見ていることについては，ほとんどの著作に記述があった．第2の模倣については，模倣期とその時期を命名しているものは少なかったものの，約半数に記述があった．しかしながら，第3の歌や音楽に反応して身体を揺らして楽しさを表現する様子について，月齢によってどのように変化，発達していくかということを述べたものはほとんどなかった．

喃語については月齢ごとに詳しい解説があるのに，楽しさや嬉しさを身体を動かすことで表現することについては詳しい解説がなく，乳幼児期をひとまとめにして「リズムにのって動く」などの記述で片付けられている．それはなぜなのだろうか．「日本の子どもの0歳からの音楽表現の発達研究は言語研究に比して，立ち遅れている」と永田（1981）によって20年も前から指摘されている．そして現在でもその状況に大きな変化はない．つまり，乳児の生活に視点をもつ音楽研究が少ないためであるといえよう．

よく見て模倣すること，つまり自ら学ぶ意識行動は，人類に普遍的なものであると原ひろこは述べている．（原 1979）それは「子ども文化人類学」の中でヘアーインディアンの文化に「教える」とか「教わる」といった概念が全くないことを報告していることからわかる．

生後間もない乳児の驚くべき程の「よく見て，模倣する力」を支え伸ばしていくことは，現在の我国では非常に大切な事であると考える．なぜならば「教えよう」「教えられよう」という意識行動が氾濫しすぎていると感じるからである．

今後は，正高（2001）による「笑いと手足の運動の同期の研究」のように，身体的な表現の様子について乳幼児の発達に即した研究も行っていきたい．

さらに音声学，言語学，心理学，脳生理学などさまざまな関係学問分野との共同研究や，情報交換なども進める必要を感じる．乳児期のよりよい保育環境を考えていく上で，言語的発達研究や音楽的発達研究ばかりでなく，リズム運動などとの相互のかかわりなど，総合的な考察がますます重要になってきているためである．

子どもたちは楽しい時や嬉しい時には全身でその気持を表している．相手の気持を思いやるようなこころも，そういった嬉しさ，楽しさを共有し，共感することで育つのではないだろうか．ことばがまだ十分に使えないこの頃の子どもにとって，コミュニケーションはそのほとんどが見ること，まねること，そして自分自身の身体で表現することで行っているからである．

尚，本論は第54回日本保育学会において，口頭発表，及び，論文集に発表したものに加筆したものである[4)]．

＜文　献＞

(1) 細田淳子(2001)『ことばの獲得初期における音楽的表現――子どもがうたい始めるとき――』 東京家政大学研究紀要第41集　pp.107～113

(2) 小山正(2000)「ことばが育つ条件」 p.6　培風館

(3) 小山正(1999)『日常生活における子どもの人形を用いた象徴遊びにみる認知発達とボキャブラリー・スパートに関する研究』 音声言語医学40，3，pp.193～208

(4) 伊藤勝志(1987)『幼児期初期の歌唱行動についてII』北海道教育大紀要38-1 pp.167～177

(5) 志村洋子(1991)『一歳児の歌――歌唱様発声の音響的分析的研究』 音楽教育の展望 p.152 音楽之友社

(6) 吉村真理子（1990）保育講座第11巻 「乳児保育」千羽喜代子他編 p.59 ミネルヴァ書房

(7) 岩堂美智子（1991）「新・乳児の発達と保育」 p.79 ミネルヴァ書房

(8) 小西正一(1994)「小鳥はなぜ歌うのか」岩波新書338　p.178　岩波書店

(9) 切替一郎，沢島政行（1968）「ことばの誕生」岩淵悦太郎他　pp.62～63　日本放送出版協会

(10) 坂口りつ子，豊永家寿子（1992）幼児教育・保育講座12「乳児保育」 小林一他編 p.70　福村出版

(11) 宇佐川浩(1987)子どもと音楽第2巻「障害をもつ子どもと音楽」p.195　同朋舎

(12) 小川博久（1988）子どもと音楽第6巻1「幼稚園・保育園の生活と音楽」p.17　同朋舎

(13) 永田栄一(1981b)『子どもの音楽表現の形式と学習II』 季刊音楽教育研究27号　pp.154～162　音楽之友社

(14) 原ひろ子（1979）「子どもの文化人類学」p.175，p.187　晶文社

(15) 正高信男(2001)「子どもはことばをからだで覚える」中公新書1583第3章　　中央公論社

＜注＞

1）小野明美，本学児童学科助手，本学ナースリールーム保育士．渡辺千恵子と共につくし組担任

2）シャープ液晶ビューカム VL-HL2　Hi8

3）『たこやきなんぼマンボ』－NHK教育テレビ「おかあさんといっしょ」でうたわれていた歌　作詞　もりちよこ　作曲　パラダイス山元

4）第54回日本保育学会論文集 pp.354～355　2001

Summary

Babies vocal sounds are classified into two categories, namely linguistic sound and musical sound. In my previous article, I explored which sound comes earlier in infants' life. Following the last research, I have examined expressions which appear before speaking or singing. I have obtained two results as follows: Infants learn how to make expression by looking at one another carefully and imitating others' physical movement. For example, only five or six month old babies smile at one another and mimic others' voices, looking at other babies' eyes. The second observation is that infants make physical expression by means of body movement which is available to them at that moment. Namely, infants who can walk often dance with their both hands raised. Ones who can only stand may bend and stretch their knees with swinging their upper bodies. Ones who cannot stand just move their hands up and down in beds.